大学生の精神科受診意図と自尊感情の関連

○小池春妙¹・伊藤義美¹

(¹名古屋大学環境学研究科)

キーワード：援助要請・自尊感情・うつ

Influence of self-esteem on the intention of seeking help from psychiatry of University students.

Harumi KOIKE¹, Yoshimi ITO¹.

(1 Graduate School of Environmental Studies, Nagoya Univ.)

Key Words: help-seeking, self-esteem, depression

目 的

精神科受診ではその低い受診率や受診の遅れなどが問題として指摘され、その改善が重要な課題となっている。精神科受診は医師に援助を求めることであり、専門家への援助要請とも言える。援助要請とは個人が自分では解決できない問題に直面した時に他者に援助を求めることである(水野・石隈, 1999)。援助要請を論じる上で重要なパーソナリティ変数に自尊感情がある(Tessler & Schwartz, 1972; Bramel, 1968)。援助を受けることは自尊感情への脅威をもたらすため、援助要請が抑制されると考えられるからである。そもそも、援助要請によって自尊感情への脅威を感じるかどうかは、その援助要請を個人がどのように受け止めているかが関連する可能性がある。精神科受診はスティグマや治療への不安と関連しており、受診行動を個人がどのように感じるかが非常に重要だということはすでに様々な研究で明らかにされている(e.g., 奥村他, 2007; Vogel, et al., 2007)。

そこで今回は、自尊感情と受診意図の関連についても、精神科受診の受け止め方が影響するかどうかを明らかにするため調査を行い、共分散構造分析によって検討する。

方 法

調査協力者：大学生 314 名 (男 150 名, 女 138 名, 不明 26 名; 平均年齢 19.47 ± 1.04 歳)

質問紙構成：1) 自尊感情 Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の邦訳版を用いた。2) うつ病症例文・病気の判断 DSM-IV-TR の診断基準を満たす症例文が作成された。調査協力者は「もし自分が同じ状態になったら」と想定するように教示され、読了後、その状態が病気か病気ではないかを判断することを求められた。3) 受診意図 症例文と同じ状態になった時に精神科を受診するかどうかを 3 項目で尋ねた。4) 行動への感情反応 先行研究(西川・高木, 1990)を参考に、被援助者が経験する感情として 10 個の形容詞を用いて、症例文の状態で精神科受診を決めたとしたらどの程度その感情を感じるかを評価させた。

結 果

基礎的分析：自尊感情に対して主成分分析を行った結果、項目 8 のみ因子負荷量が低かったため、この項目を除いた 9 項目を分析に用いた。行動への感情反応に対しては先行研究の処理に従い因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行なった結果、2 因子解が抽出され、それぞれ肯定的反応と否定的反応と命名した。クロンバックの α 係数を算出した結果、自尊感情 ($\alpha = .82$)、肯定的反応 ($\alpha = .71$)、否定的反応 ($\alpha = .81$)、受診意図 ($\alpha = .87$) となり全てにおいて十分な値であることを確認した。なお、以降の分析ではそれぞれの平均値を用いた。

パス解析：症例文を病気だと判断できるかでパス係数が異なるかどうかを検討するため、多母集団の同時分析を実施した。その結果、モデルの適合度は $\chi^2 = 19.74$ ($p < .01$), $df = 7$,

GFI = .97, AGFI = .91, RMSEA = .08 であり、ある程度適合したモデルが得られた (Fig. 1)。

病気の判断によらず自尊感情は否定的反応に負の影響を与えていたが、受診意図と肯定的反応には影響していなかった。肯定的反応は受診意図に正の影響を与えていた。病気の判断による違いは否定的反応から受診意図への影響に認められ、病気だと判断した場合のみ負の影響を与えていた。なお、受診意図における R² 値は、病気だと判断した場合は .06 であり、病気ではないと判断した場合は .03 であった。

考 察

本研究の結果から、自尊感情が精神科受診への否定的反応に影響し、否定的反応が受診意図に影響することが示された。しかしながら、その関連は症例文を病気だと判断した場合のみであり、病気ではないと判断した場合は自尊感情の影響がないことが示された。つまり、自尊感情は直接受診意図に影響しなかったと言える。精神科受診の場合はその行動を個人がどう感じるかが重要である可能性が今回示された。加えて、病気の判断によって受診意図に影響する感情が違ふことから、本人の認識状況によってアプローチを変えていくことが精神科受診を勧める際には重要であると考えられる。

引用文献

- Bramel (1968). In Abelson, et al., (Eds.), *Theories of cognitive consistency: A sourcebook* (pp. 355-365.) New York: Rand-McNally.
- 水野・石隈 (1999). 教育心理学研究, **47**, 530-539.
- 西川・高木 (1990). 実験社会心理学研究, **30**, 123-132.
- 奥村他 (2007). 日本社会精神医学会誌, **16**, 156-167.
- Rosenberg (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Tessler & Schwartz (1972). *Journal of Personality and Social Psychology*, **21**, 318-326.
- Vogel, et al., (2007). *Journal of counseling Psychology*, **54**, 40-50.

Fig 1. 共分散構造分析の結果 (n = 314)

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

誤差及び非有意なパスは省略した。

パスに示された値は全て標準化パス係数である。